

思いつかれていない代替理論と認識的正当化

岸 哲生 (Tetsuo Kishi)

大阪大学人間科学研究科

自然科学の歴史は誤りの連続だった。フロギストンやエーテルは歴史上の一定の期間にわたって、人類の知識の一部とみなされていたが、現代では誤りの多い仮説の中の存在に過ぎないとみなされている。では、現代の科学理論における素粒子や重力場もまた、未来の人々にとっては幻の存在にすぎないのだろうか。

スタンフォードは、科学者たちに思いつかれていない代替理論 (unconceived alternatives) が既存の理論よりも優れている可能性があることを示すことで、帰納法を用いて現在の理論よりも優れた代替理論が思いつかれていないで存在する可能性を指摘した (Stanford 2001)。この指摘が含意しているのは、現代の科学理論は、我々にとって信じるに値しない理論であるという解釈である。

本発表ではこの見解に反論し、スタンフォードの指摘が妥当なものであることを認めつつも、科学理論を受け入れることが認識的に正当であると主張する。

そのために本発表では、認識論における認識的正当化の理論を参照する。特に、21 世紀に始まった潮流である知識第一主義認識論では、認識的正当化は知識概念の観点から分析されてきた。たとえば Rosenkranz (2018) では、

($\neg K \neg K$) ある命題 p が認識主体 S に対して正当化されているのは、認識主体 S がその命題を知る立場にないことを知る立場にない場合であり、その場合に限ると分析される。Rosenkranz は「命題 p が認識主体 S に対して正当化されている」および「認識主体 S が命題 p を知る立場にある」という命題を様相演算子 J および K を用いてそれぞれ「 Jp 」「 Kp 」と表現し、

$$Jp \leftrightarrow \neg K \neg Kp$$

と分析した。

本発表では、この ($\neg K \neg K$) 理論を参照しつつ、科学理論の認識的正当化を議論する。

引用文献

Rosenkranz, S. (2018). The structure of justification. *Mind*, 127(506), 309-338.

Stanford P.K. (2001), Refusing the Devil's Bargain: What Kind of Underdetermination Should We Take Seriously? *Philosophy of Science*. 2001;68(S3):S1-S12.